

提出日：令和3年1月7日

聖徳大学大学院 博士前期課程  
通信教育課程

フレーベルの「予感」概念に基づいた質の高い幼児教育に関する研究  
—『母の歌と愛撫の歌』を中心に—

A Study of High Quality Education Based on the Fröbel's Concept of "Premonition":  
Focusing on the "Mutter und Koselieder"

児童学研究科 保育学専攻  
2001184002 信田 るい

提出日：令和3年1月7日

フレーベルの「予感」概念に基づいた質の高い幼児教育に関する研究

—『母の歌と愛撫の歌』を中心に—

A Study of High Quality Education Based on the Fröbel's Concept of "Premonition":

Focusing on the "Mutter und Koselieder"

児童学研究科 保育学専攻 2001184002 信田るい

指導教員 奥村典子

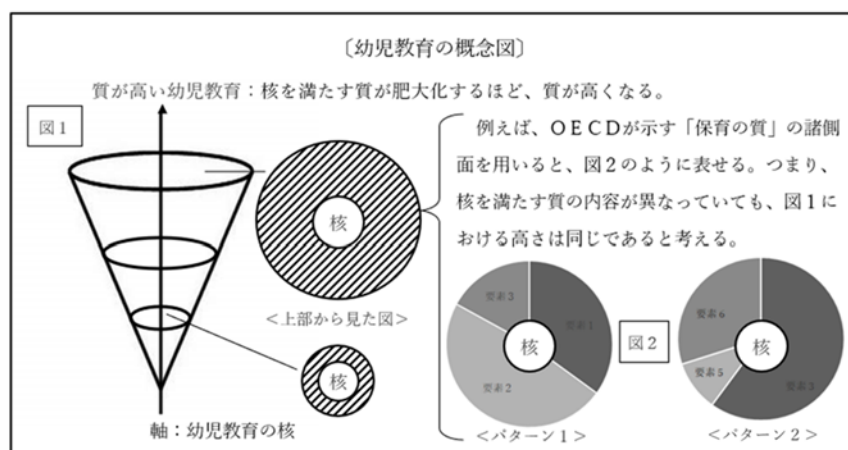
## 1. 問題の所在と研究の目的

2000年以降、質の高い幼児教育<sup>1</sup>が重視されている。しかし、その求められている「質」が何であるのかは曖昧であり、各々で捉え方が異なっている。

野澤祥子によると、OECDにおける「保育の質」の定義は、「子どもたちが心身ともに満たされ、豊かに生きていくことを支える環境や経験」とされている<sup>2</sup>。それに関して、厚生労働省は、「子どもたちが心身ともに満たされ、より豊かに生きていくことを支える保育の場が準備する環境や経験のすべてである（多面的で複合的なもの）<sup>3</sup>」とし、6つの「保育の質」における諸側面を挙げている。また、「相対的・多元的なものとしての保育の質」について、「社会・文化における保育の機能や方向性の捉え方や価値づけに依存する相対的・多元的なもの」及び「一元的に定義することができない」ことも明示している<sup>4</sup>。さらに「保育所等における保育の質の基本的な考え方」として、「保育の質は、子どもが得られる経験の豊かさと、それを支える保育の実践や人的・物的環境など、多層的で多様な要素により成り立つ。（保育の質を捉えるに当たり、「子どもにとってどうか」という視点を基本とする・一定の水準で保障すべき質と実践の中で意味や可能性を追求していく質の両面がある・様々な文脈や関係性を考慮することに留意）」ということも示している<sup>5</sup>。そして、文部科学省は、「幼児教育の質の向上のための具体的方策」における6つの柱を掲げている<sup>6</sup>。

したがって、現代における幼児教育の質は、子どもを取り巻く環境の影響を受けているとともに、様々な要素から構成されている。このことを踏まえ、発表者が考える「幼児教

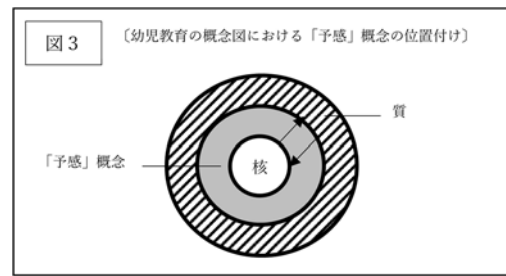
育の概念図」は下図の通りである。



発表者は、保育者による不変かつ不動の軸を基に、幼児教育は営まれていると考えている。さらにその軸は、幼児教育の本質、すなわち「核」によって構成されていると捉えている。そして幼児教育の「核」については、子どもが人格形成していく上で、保育者が子どもに寄り添い伴走しながら、子どもが達成感や充実感などを味わえるような心豊かな経験を通して、将来、自身の生活においてより良く「生きる」ための選択をしていけるよう育ちを支えることであると考えている。このことは、すべての幼児教育において、子どもの人格形成の基礎を培う上で変わらない内容であると言える。それに対して幼児教育の「質」とは、「核」を満たす成分であり、条件によって中身が変化し得るものであると捉えられる。

以上のことから、幼児教育の「核」は、時代が変化しても継承され続けてきた幼児教育における本質であり、不変的なものであるが、「質」は、それを構成する諸要素によって異なるため、可変的であると言える。また、質の高い幼児教育の実践には、「核」を現場の条件に即した「質」で満たし、それらが分離しないよう一体的に結合させると同時に、「核」により多くの「質」を付加させ、全体が肥大になるようにする必要があると発表者は捉えている。さらに、それはフレーベルの「予感」概念によって可能であると考えている。田岡由美子は、「彼のあらゆる教育実践と思索の全体は、根本的に『予感』によって貫かれている」ことを指摘する<sup>7</sup>。また、荘司雅子は、フレーベルにとって「(前略)教育とは何か、基礎教育とは何か、理想の教育とは何か、また人間の本質は何か<sup>8</sup>」が中心問題であったと指摘する。両者の指摘は、フレーベルは「予感」による教育によって、人間形成及び人格形成を意図していたと解釈できる。さらに文部科学省が、「(前略)幼児教育は、次代を担う子どもたちが人間として心豊かにたくましく生きる力を身につけられるよう、生涯にわ

たる人間形成の基礎を培う普遍的かつ重要な役割を担っている<sup>9)</sup>と明示していることから、現代の幼児教育の基底にはフレーベルの「予感」概念があると考えられるのである。それは図3のように、幼児教育の「核」に最近の位置にあり、



それを満たす「質」を繋ぐ役割があると発表者は捉えている。このように、「予感」概念は、幼児教育の「核」及び「質」の両方に働きかけるものであると同時に、フレーベルの思想を研究する上で不可欠な概念なのである。また、それは、育てられる立場にある子どもだけのためではなく、子どもを育てる立場の大人に対する人間形成にも同様に、有意義なものであると発表者は考えている。

本研究では「予感」概念に基づく質の高い幼児教育を検討する上で、フレーベルが著した『母の歌と愛撫の歌』を用いる。『母の歌と愛撫の歌』は、フレーベルが説く教育を子育て中の母親だけでなく、子どもの人的環境すべてを対象としたものであり、社会全体とともに子どもを育むという連帯意識を高め、母親の育児不安の解消など、現代の子育てにおける課題も乗り越えられる可能性を秘めていると発表者は考える。また現代においては、家庭の教育力の低下が問題視されており、文部科学省は、「家庭は、子供たちの健やかな育ちの基盤であり、家庭教育は、すべての教育の出発点です」と示している<sup>10)</sup>。すなわち、質の高い幼児教育は、質の高い家庭教育であると同時に、子どもの生活が家庭から始まり、そのなかで家庭教育が行われることから、幼児教育における出発点が、家庭生活及び家庭教育と捉えられるのである。したがって、家庭生活及び家庭教育というすべての生活及び教育の原点に還る重要性を示唆する『母の歌と愛撫の歌』に基づいて、家庭における「予感」を捉えるとともに、家庭教育の延長線上にある幼児教育において生じる「予感」の場面及び陶冶の方法を保育者が把握することは、質の高い幼児教育の実践に繋がると筆者は考えている。

以上のことから、フレーベルの思想「予感」概念の整理・分析を通して、質の高い幼児教育とは何であるのかを追究していく。

## 2. 先行研究の検討

### ①幼児教育の質

到達点：子どもを取り巻く環境の影響を受けるとともに、様々な要素から構成されてい

ることから、一元的に定義することはできず、多面的で複合的なものである。

課題点：国としての「保育の質」の定義が統一されていないため、何をもって質の高い幼児教育と言えるのかが不明瞭である。

## ② フレーベル思想

到達点：荘司の研究によって、フレーベルにおける思想がロマン主義と象徴主義を基調としているとともに、万有在神論が特徴であることが明らかにされている。それは、あらゆる万物の出発点が神であると同時に、万物の本質は神性という考え方である。また、その他にも荘司は、神秘主義及び理想主義における見方を示唆している。そして、フレーベルの全教育学は宗教を基調にしており、フレーベルの思想が宗教から萌芽したものであることが明示されている。さらに、その思想は、荘司及び長田新によって難解かつ深遠、神秘的と指摘される。

課題点：宗教的な意味としてフレーベルの思想が伝わること、フレーベルの思想は難解かつ深遠であることから、その思想や教育観などを理解した上で幼児教育を実践している人が少ないことの2点が挙げられる。

## ③ 「予感」概念

到達点：ボルノウ及びシュプランガーの研究によって、「予感」概念は、万物、すなわち象徴・シンボルを「外的なものを内的に」及び「内的なものを外的に」という双方向から捉えると同時に、神に回帰することでその本質的意味を感じ得る対象把握能力と言える。そして、田岡等の研究によって、「予感」は自覚及び意識して陶冶されることが重要であり、それによって「予感」内容が深化・向上するとともに、人間の生きる次元が革新あるいは高次化し、「いのち」・「魂」・生活の質が変化すると考えられる。また、田岡は、「予感」概念における認識の連続的な発展経路における従来の位置付け及び「非連続性」を指摘している<sup>11</sup>。

課題点：「予感」概念における明確な位置付けが研究者によって異なるため、各々の先行研究における「予感」概念の捉え方を整理する必要がある。さらに、田岡は「(前略)『予感』は、一回ごとに成立する『非連続性』と、次第に内容的に深化してゆく『連続性』との二面性を構造的に包含していると言えよう<sup>12</sup>」と主張している。しかし、その性質には矛盾が生じると捉えられるため、「予感」概念の性質における検討が必要である。

#### ④『母の歌と愛撫の歌』

到達点：ボルノウの『母の歌と愛撫の歌』における見解から、フレーベルが説く教育に還る上で『母の歌と愛撫の歌』が不可欠であることが明らかである。そして、『母の歌と愛撫の歌』は、家庭生活及び家庭教育というすべての生活及び教育の原点に還る重要性が示唆しており、それを通した「予感」によって、母になることや子育て等の本質的意味を感得できると言える。そのため、『母の歌と愛撫の歌』は、今日の幼児教育の質ならびに家庭の教育力の向上に果たす意義を有していると捉えられる。

課題点：『母の歌と愛撫の歌』を通してフレーベルが説く教育に還る意義を子どもの育ちを支える立場にある大人が理解する必要がある。そのため、今日の幼児教育の質ならびに家庭の教育力の向上において、『母の歌と愛撫の歌』に還ることの意義を検討する必要がある。また、『母の歌と愛撫の歌』で示唆されている「予感」は、日常生活において当たり前のこととして捉えられている内容を含んでいるため、「予感」の自覚化及び意識化を促す必要がある。

### 3. 研究の方法と構成

本研究は、『フレーベル全集 第五巻 続 幼稚園教育学 母の歌と愛撫の歌』を資料とする文献研究である。本論の構成は以下の通りである。

第1章：フレーベルの思想を万有在神論（神秘主義）、ロマン主義、象徴主義、理想主義、宗教的文化教育学の5つの視座から検討する。さらに、現代の幼児教育の根底にも流れている思想を見出し、幼児教育の質の内容と照らし合わせる。

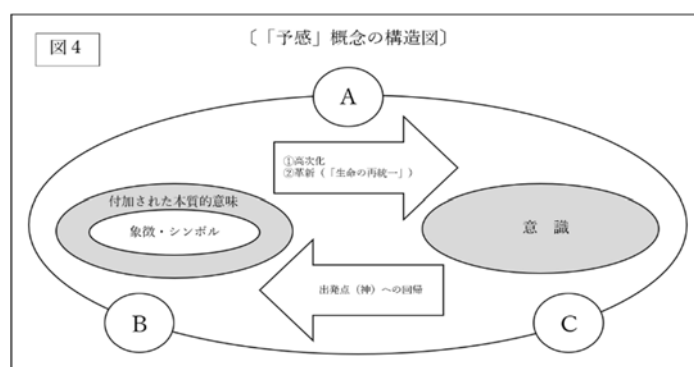
第2章：田岡由美子、浜田栄夫、長田新、篠原助市、シュプランガーによる「予感」概念における到達点と課題を明らかにするとともに、その見解を整理した上で筆者が捉える「予感」概念の構造に関して述べる。

第3章：『母の歌と愛撫の歌』を分析の俎上に載せる意義及び『母の歌と愛撫の歌』に還ることは、フレーベルが説く教育に還ることであるとともに、今日の幼児教育の質ならびに家庭の教育力の向上に果たす意義について論じる。

### 4. 本論の成果

本研究では、フレーベルの思想が、「永遠の法則」・「生命の法則」・「球体の法則」・「三位

一体法則」を基盤としており、それらはすべて同意義であることが明らかになった。また、フレーベルの思想は、「外的なものを内的に」及び「内的なものを外的に」して神に回帰するという独自の「予感」概念によって貫かれて



ている。このように、フレーベルの思想には独自性があるため、各々は一見部分的全体として分離し、現代とかけ離れているようであるが、実際はいずれも神を出発点にもっていることや、それらは神による「内面的結合」・「内面的交互作用」・「内部的統一」によって根元的には共通していることから一つの統一体を形成していると解釈できる。したがって、フレーベルの思想は、それぞれが部分的全体として点であると捉えられるとともに、すべてが相互に関係し合っていることから線として繋げられ、最終的に統一体として、その思想全体は円形を成していると言えるのである。さらに、そのように捉えるためにはフレーベルの思想全体を貫く「予感」を通して、人間を高次化あるいは革新し、意識に導くことが重要である。「予感」概念における性質や構造（図4）も明らかとなった。すなわち「予感」概念は、①人間ならではの力であり、年齢に関係なく日常生活において生じる、②「いのち」及び「魂」の発達に関与し、人間の生きる次元を革新及び高次化するため、人間形成及び人格形成において重要である、③人間が「いのち」及び「魂」をもって生活し続ける限り、連続的かつ持続的に生じている、④人間独自の心情及び精神と結び付きをもつと同時に、「静観」を伴うことで対象を直接的かつ全体的に感得できる、⑤自身と対象を一体化させると同時に、対象にその本質的意味を付加すると捉えられるのである。また、「予感」は対象、すなわち象徴・シンボルに「感情移入」し、上述した「外的なものを内的に」及び「内的なものを外的に」するという双方向によって、その本質的意味を感得することができるのである。このことは、図4を用いて詳述すると、人間は、「予感」を通して高次化あるいは革新することによって捉えた対象の意味内容を意識にまで高めると同時に、出発点（神）に回帰することで本質的意味を感得できると言える。さらに、「予感」による革新の意味については、「予感」を自覚かつ意識している人間における純粋なものと、「予感」が意識にもたらされなくなった人間に対する「生命の再統一」、「生命の革新」という2通りがあることも明らかとなった。このようにして、「予感」後の対象の見方はより一層深い

ものに変化するため、「予感」は人間の「いのち」・「魂」、生活の質を深化・向上させるのである。そして、人間の「いのち」・「魂」、生活の質を深化・向上させる過程は、人間形成及び人格形成の過程でもあると言える。そのため「予感」概念は、人間の各段階における要求を忠実に拡充するとともに、次の段階における人間の発展を完全なものにするために必要であることが明らかになった。また、上述の過程は連続していることから、子どもの時期に培われた「予感」は、生涯における人間形成及び人格形成の基礎になると同時に、人間が大人になっても「予感」を自覚かつ意識できるかどうかに関係する。また、子どもに関わる人的環境が、注意深く「予感」を陶冶することの重要性を理解し、それを自覚及び意識することは、幼児教育の質の向上に繋がることを見出した。さらに、「予感」を通して幼児教育の「核」及び「質」が一体的に機能すると同時に、「核」を満たす成分としての「質」を肥大化かつ向上させることによって、質の高い幼児教育は実践できると言える。それはフレーベルが説く教育に還ることを意味する。フレーベルが開拓した幼児教育を現代において生かすためには、「予感」概念の重要性を理解し、それを自覚及び意識することが重要である。

そして、家庭生活及び家庭教育はすべての生活及び教育の原点である。このことから、幼児教育を営む上で家庭との連続性を考慮することは不可欠である。また、「予感」は日常生活において生じるため、子どもの生活が連続していることを踏まえると、家庭生活と園生活で生じる「予感」も連続しているのである。すべての教育の出発点は家庭教育であり、家庭の教育力を向上させることは質の高い幼児教育の実践において欠かせないのである。すなわち、質の高い幼児教育は、家庭の教育力を向上することと一体的に捉える必要がある。『母の歌と愛撫の歌』には、フレーベルの教育思想の根底にある家庭生活及び家庭教育というすべての生活及び教育に還る重要性が示唆されている。だからこそ、現代において『母の歌と愛撫の歌』に還ることが不可欠なのである。このように、フレーベルの説く教育に還るために『母の歌と愛撫の歌』は避けては通れないのであり、幼児教育の質ならびに家庭の教育力の向上を促すものであると筆者は捉えている。さらに、『母の歌と愛撫の歌』における歌の真の意図を理解するためには、上述したことと同様に、各々の歌における部分的全体としての「予感」であることを踏まえ、神の統一の下で全体的に捉える必要がある。そして、『母の歌と愛撫の歌』における今日の幼児教育の質ならびに家庭の教育力の向上に果たす意義については、①女性が母になることを当たり前のこととしてではなく、「人間の最高の位」という立ち位置や、より深い幸福、喜びを感得できるようにすること、

②「予感」を共通基盤とした環境のなかで子どもを育むことによって、家庭・園・学校が同じ方向性をもって子どもの人間形成に関われること、③子どもが「いのち」の交互関係のなかで直接「予感」したり、それを陶冶したりできるよう意識的に環境を整える必要があることを保護者の意識にもたらすことにより、家庭の教育力の低下を防ぐこと、④家庭生活における直接的な「いのち」の交互関係を通した「予感」の内容を、「予感」の直接性及び全体性という性質をもって感得できるようにすること、⑤は③で述べたような直接的体験を通した「予感」が、現代の幼児教育にも変わらず受け継がれている内容であることを感得し、保育者における幼児教育の「核」の構成を助けるということ、⑥子どもが表現した「予感」の内容を注意深く捉えられるようにするとともに、子どもの「予感」の段階を把握し、その陶冶に活用できることが明らかとなった。

以上のことから、『母の歌と愛撫の歌』に還ることは、質の高い幼児教育、家庭の教育力の向上に繋がると言えるのである。また、現代においてこそ「予感」概念の重要性を理解し、それを自覚及び意識し、フレーベルの『母の歌と愛撫の歌』に基づいた幼児教育を実践することは子どもや保護者、自身の「予感」を陶冶すると同時に、質の高い幼児教育ならびに家庭の教育力の向上に繋がると同時に、現代において家庭の教育力の向上などの課題を乗り越えるための意義があると筆者は考える。

## 5. 今後の課題

本研究の課題としては主に2点挙げられる。1点目は、「予感」概念を通した幼児教育の実践及びその方法について検討することである。本研究においてはフレーベルの思想、特に「予感」概念を再考察することで、現代における質の高い幼児教育が実践できることを提案した。そしてその意図としては、理論と実践を結び付けた幼児教育の重要性を発信することである。本研究では、「理論」に関する内容を明らかにしたことから、それを実践に活かすことが今後の課題である。そのためには、本研究で明らかになった「予感」概念を自覚及び意識して実践することを通して、現代における「予感」の場面を捉えるとともに、具体的な「予感」概念の活かし方を発信できるような研究を行いたいと考えている。

2点目は、保育者及び保護者だけでなく、「予感」の重要性を子どもの育ちに関わるすべての人が理解できるよう研究を進めたい。なぜなら、子どもを教育する場は、家庭及び園または学校に限らず地域社会も含まれるため、子育てに直接関わらない立場にある人々も「予感」の重要性を理解することは、それらが一体となって同じ方向性の下で子どもの育

ちを支える環境づくりに繋がると考えるからである。つまり、それは、地域の教育力の向上も見据えた研究である。また、家庭教育のみならず、地域社会における教育の連関までも意識した幼児教育は、質の高いものと言えるだろう。これらのことから、保育者から保護者へ、そして地域へと「予感」を通した実践を広げていくことは、子どもを取り巻くすべての人的環境に対する子育てへの参加及び協働の意識を高め、きめ細かな家庭教育支援及び子育て不安の解消等にも繋がる可能性を秘めていると考えられる。そのため、直接幼児教育及び家庭教育に関わっている保育者や保護者だけが「予感」の重要性を理解できるという研究に留まらず、すべての人々に対しても、その解釈を促せるように発信することが今後の課題と言える。

---

<sup>1</sup> 現場において保育者が実践する教育や保育は、管轄の違いがあっても同意義のいとなみである。そのため、本研究では研究の性質上、それらを「幼児教育」という言葉で統一して表記する。

<sup>2</sup> 野澤祥子「保育所等における保育の質の確保・向上に関する検討会（第1回） 資料2－3」『保育の質とその確保・向上のために』（閲覧日：2021年1月5日）

<https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-11921000-Kodomokateikyoku-Soumuka/0000207473.pdf>

<sup>3</sup> 厚生労働省「保育所等における保育の質の確保・向上に関する検討会（第1回） 参考資料」『保育所等における保育の質の確保・向上に関する基礎資料』（閲覧日：2021年1月5日）

<https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-11921000-Kodomokateikyoku-Soumuka/0000207475.pdf>

<sup>4</sup> 厚生労働省『保育の質の確保・向上と保育実習について』（閲覧日：2021年1月5日）

<https://www.hoyokyo.or.jp/19-2gyoseisetsumei.pdf>

<sup>5</sup> 厚生労働省「保育所等における保育の質の確保・向上に関する検討会（第10回） 資料2」『保育所等における保育の質の確保・向上に関する検討会 議論のとりまとめ【概要】（案）』（閲覧日：2021年1月5日）

<https://www.mhlw.go.jp/content/11907000/000643507.pdf>

<sup>6</sup> 文部科学省「幼児教育の質の向上について（中間報告） 資料4－2」（閲覧日：2021年1月5日）

[https://www.mext.go.jp/kaigisiryō/content/20200526-mext\\_syoto02-000007441\\_8.pdf](https://www.mext.go.jp/kaigisiryō/content/20200526-mext_syoto02-000007441_8.pdf)

<sup>7</sup> 田岡由美子『フレーベルにおける「予感」の研究——解釈学的・人間学的考察』高菅出版、2014年、144頁。

- 
- <sup>8</sup> 荘司雅子『フレーベルの教育学』大八洲出版、1944 年、59 頁。
- <sup>9</sup> 文部科学省「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について（中間報告）（案） 第 2 節 幼児教育の意義及び役割」（閲覧日：2021 年 1 月 5 日）  
[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryo/attach/1395402.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryo/attach/1395402.htm)
- <sup>10</sup> 文部科学省「家庭の教育力の向上」（閲覧日：2020 年 12 月 10 日）  
[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shougai/katei/1246352.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/shougai/katei/1246352.htm)
- <sup>11</sup> 前掲注 7、田岡由美子『フレーベルにおける「予感」の研究——解釈学的・人間学的考察』46 頁。
- <sup>12</sup> 同前、140 頁。